

大学生の友人関係において ほめることが与える影響の検討

○矢野慶次郎
(山口大学教育学部)

押江隆
(山口大学教育学部)

目 的

ほめられることが様々な好影響を与えることを指摘する論文は複数存在する。例えば青木(2009)によれば、我々はほめられるというフィードバックによって嬉しい・誇らしいといった感情の変化を、経験を通じて理解するとされている。

一方で、実際の日常生活の中で我々が他人をほめることは少ないのではないだろうか。例えば朝日新聞(1998)には、結婚してから仕事を辞め、夫以外の他者との関わりがなくなり、せめて夫に一言ほめて欲しいという意見が寄せられている。ほめることが良いことであることは誰もが分かっているはずなのに、どうしてほめ行動を取らないのだろうか。

そこで本研究では、大学生がほめ行動を取る際の実態について調べるために、実験とインタビューによる調査を行う。

方 法

調査協力者 6名(男性6名, 平均年齢20.8歳(範囲19~23歳))。そのうちインタビューを行ったのは3名であった。

手続き 初対面の2人1組のペアを作り、1人がパズル課題を解き、もう1人をほめ手とし、ほめ行動を取ってもらった。1回のパズル時間は10分、2分ごとに1回のほめ行動を取るようほめ手に教示した。ほめ手には実験の前にほめ言葉の例を示しているが、使用するほめ言葉は例以外でも自由に使用してもらった。この手続きを2回繰り返した。その後、ほめ手の実験参加者に対し、半構造化面接を行った。具体的には、「ほめる際に緊張したか」、「実験の時間や内容に問題はあったか」、「普段からほめることを意識するか」などを尋ねた。面接時間は10~15分程度であった。面接内容は実験参加者の許可を得てICレコーダーに録音し、それをもとに逐語録を作成した。パズル課題は、オンライン上のものを用いた(<http://www.nikoli.com/ja/puzzles/norinori/>)。

結 果

KJ法を参考にし、逐語録の分析を実施した。31枚のカードが分析対象となった。

まず内容を大まかに分けると、自分が普段どのくらいほめるか・あるいはほめられるかといったこと(【日常生活でのほめ】)、ほめる際に他人を意識した表現を用いる・あるいは他者との関係を考慮した結果ほめないといった要素(【社会的視点】)、自分の中で使いやすいほめ言葉を用いるといったこと(【本人が使いやすいほめ言葉】)、そして最後に実験の方法に関わる部分【実

験の手続き】の4つに分けられた。

【日常生活でのほめ】では、「普段話す中では知らずに他人をほめることはあるかもしれないが、意識してほめない」や「普段からほめられないのでほめ言葉のフレーズが出ない」という意見があった。また、(【社会的視点】)では「ほめることで(自分が所属する部活動において)他者の意欲向上になる」、「ほめ過ぎると媚びているように思われる」という意見がみられた。次に【本人が使いやすいほめ言葉】では、「抽象的な言葉は使いやすかったので利用した」、「ありのままの長所を言って、そこから派生した言葉を用いる」などがあった。最後に【実験の手続き】では、「(ほめ手が)答えをあらかじめ知っておいたほうが良い」、「自己紹介の時間が欲しい」というものがあった。

考 察

本研究では、実際に大学生が他人をほめる際の実態を知ることを目的として調査を行った。

その結果、ほめ行動を取らない理由の一つとしてほめる際に相手がほめ言葉をどう受けとるかを考慮した結果ほめないことが分かった。

これは高崎(2013)の、ほめ言葉はほめ手と受け手との間でほめ言葉の伝達と解釈が異なることがあるという指摘を合わせて考えると理解できる。ほめ手としてはほめることを目的とした行動であっても、受け手にとっては媚びているように思うのではないかと考えるあまりほめることができなくなると考えられる。ほめ行動においては、受け手がほめ行動をどう解釈するかをモデルに加えるべきであるという指摘もある(高崎, 2013)が、本研究から他者をほめる際にはほめ手がほめ行動を取る時点でも、受け手がどのようにほめ言葉を受け取るかを考慮した上でほめ行動に移っていることが示唆された。

今後の研究課題としては、他者を配慮してほめないという行動に対し、どのようにアプローチすることでほめ行動を増やすことが出来るのかについて考えていくべきである。具体的には、用いるほめ言葉によってほめやすさが変化するのか、などが考えられる。また本研究では、実験参加者が全員男性であり、外的妥当性が高いとは言えない。そのため、より多くの組み合わせで実験を行う必要があると考えられる。加えてほめない理由についても、本研究では他者に考慮した結果ほめないことがあるとしているが、それ以外の理由についても検証できていない。今後、他人をほめようと思っても実際にはほめない、といった状況に対するより詳細な調査を行うべきだろう。